

2014年3月11日 全4頁

貿易収支赤字の要因②～空洞化が赤字拡大の主因

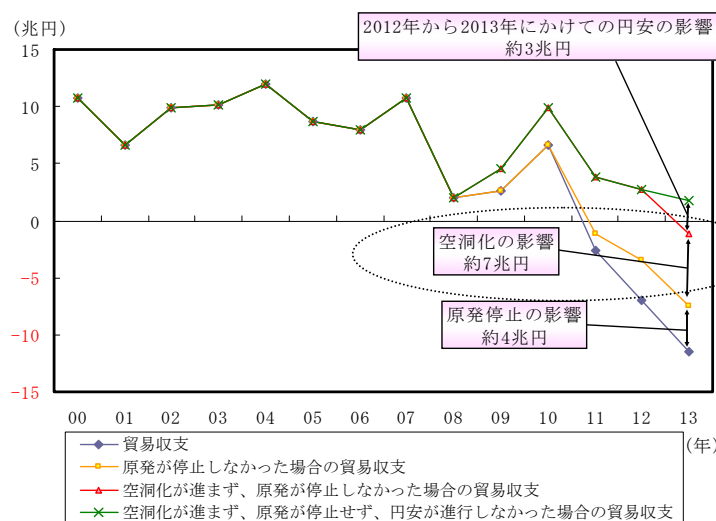
空洞化の影響で貿易収支赤字は7兆円程度拡大

経済調査部
エコノミスト 齋藤 勉

[要約]

- 2013年の貿易収支は11.5兆円の赤字となり、過去最大の赤字幅を記録した。本レポートは、その要因を分析するレポートの第2弾である。
- 貿易収支赤字幅の拡大には様々な要因があるが、筆者は空洞化が赤字幅拡大のもっとも大きな要因であると考えている。リーマン・ショック以降、日本の輸出金額と海外現地法人の売上高の動きには乖離が生じている。足下では、誘発輸出が減少している一方で、逆輸入が増加するなど、企業の海外進出に過去と異なる動きが見られている。これはもはや単なる海外進出ではなく、空洞化と呼ぶに値する動きと言えるのではないだろうか。
- 誘発輸出の減少と逆輸入の増加によって、2013年の貿易収支赤字幅は7兆円拡大したと試算される。また、今後も空洞化の動きが続けば、貿易収支赤字幅はさらに拡大が見込まれる。法人税の実効税率引き下げや、国家戦略特区の設立による規制緩和の推進などを通じて、国内の事業環境を大きく改善させるような施策が強く求められているといえよう。

原発停止、空洞化、円安が2013年の貿易収支に与えた影響



(出所) 財務省統計より大和総研作成

貿易収支赤字幅拡大の主因はリーマン・ショックを機に進行した空洞化

2013年の貿易収支は11.5兆円の赤字となり、過去最大の赤字幅を記録した。貿易収支が赤字化し、さらに赤字幅の拡大が続いている要因には様々なものが考えられるが、筆者は、空洞化が赤字幅拡大の最も大きな要因であると考えている。以下、空洞化の現状と、その結果として貿易収支にどのような影響が及んでいるかを検証していこう。

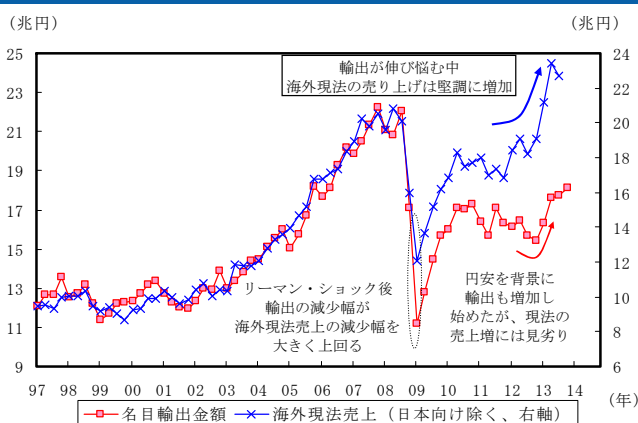
図表1は、日本の輸出金額と海外現地法人の売上高を比較したものである。両者の動きは2008年頃までおおむね連動していたが、リーマン・ショックを機に輸出が大きく落ち込み、海外現地法人売上高との乖離が生じた。足下の動きを見ても、輸出の伸びは海外現地法人売上高の伸びと比べて小さく、企業の海外進出の裏で、輸出が相対的に減少している様子が見て取れる。

企業の海外進出が貿易収支に与える影響

そもそも、企業の海外進出が日本の貿易収支に与える影響をまとめれば、**図表2**のようになる。一般的には、これらの4つの効果の中で「輸出代替効果」を重視し、企業の海外進出が輸出の減少を促し、貿易収支が悪化すると捉える向きが多いようだ。しかし、「輸出代替効果」が生じる際には、日本国内での生産が減少することから、同時に「輸入転換効果」が発生し、貿易収支に与える悪影響はある程度相殺される。

むしろ、これら4つの効果の中で重要なのは「輸出誘発効果」と「逆輸入効果」である。生産拠点が海外に移転した場合でも、その生産工程で用いる部品や材料を日本から調達すれば、輸出は増加する。これが「輸出誘発効果」であり、過去の企業の海外進出では誘発輸出が相当程度生じていたため、海外進出が進む中でも、輸出金額を減少させる効果は限定的であった。一方で、国内向けの財を海外で生産するようになると、輸入が増加することになる。これが「逆輸入効果」であるが、リーマン・ショック前は逆輸入による輸入金額は、日本の輸入全体から見ればそれほど大きい規模ではなかった。

図表1：名目輸出金額と海外現地法人売上高



図表2：企業の海外進出が貿易収支に与える影響

1. 逆輸入効果	親会社などが、海外現地法人が生産した財を購入することで、輸入額が増加する。
2. 輸出誘発効果	海外現地法人向けの部品輸出などで、親会社などから海外現地法人向けの売上高が増え、輸出額が増加する。
3. 輸出代替効果	日本で生産するはずであった財を海外現地法人が代替生産することで、海外現地法人の売上高が増加し、日本の輸出額が減少する。
4. 輸入転換効果	日本で生産するはずであった財を、海外現地法人が代替生産することで、海外現地法人の仕入高が増加し、日本の輸入額が減少する。

(出所) 大和総研作成

しかし、足下では、誘発輸出が急激に減少すると同時に、海外現地法人からの逆輸入が増加している。誘発輸出の減少は、日本で作っていた製品を海外で生産する企業が増えているだけでなく、部品の調達すらも現地で行う企業が増加したことを示唆している。また、逆輸入の増加は、企業の海外進出の目的が、最終需要地の近くで生産を行うということから、コスト競争力を求めて日本向けの製品すらも海外で生産する形に変わり始めている可能性を示している。誘発輸出が減少し、同時に逆輸入が増加しているという現象は、過去の企業の海外進出とは明らかに異なるものである。これは、もはや単なる海外進出ではなく、空洞化と呼ぶに値する動きと言えるのではないだろうか。

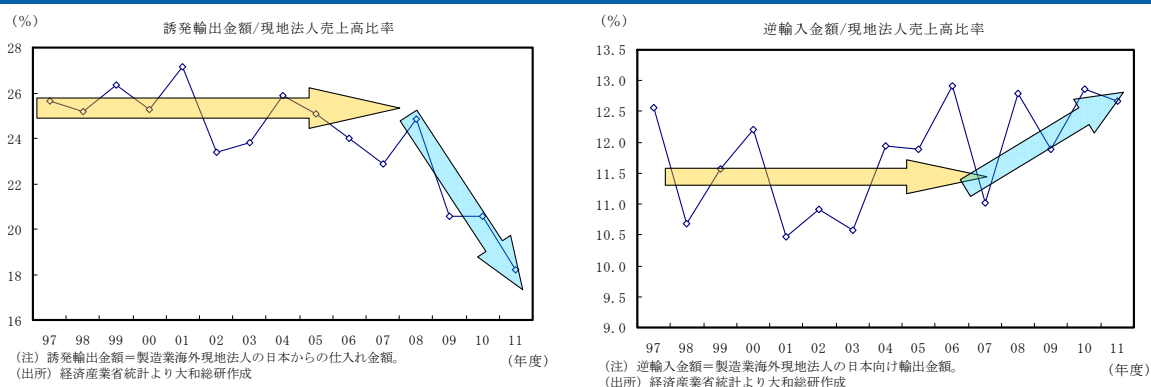
誘発輸出、逆輸入の現状

誘発輸出、逆輸入の現状を数値で確認してみよう。**図表 3** は、誘発輸出金額、逆輸入金額の現地法人売上高に対する割合を示したものである。誘発輸出金額の現地法人売上高に対する割合は、2008 年頃まで安定した推移をしていたものの、リーマン・ショックを経て急激に低下している。また、逆輸入金額について見ると、過去の数値は変動が大きいものの、リーマン・ショック以降上昇傾向にある。

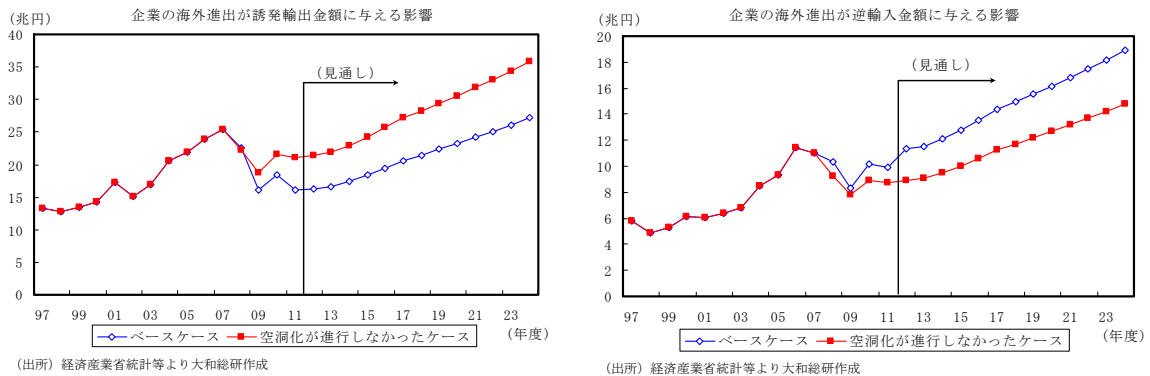
このような変化は、輸出入金額にどの程度の影響を与えているのだろうか。前述の誘発輸出、逆輸入が海外現地法人売上高に占める割合が、リーマン・ショック以前の平均的な水準で推移したケース（空洞化が進行しなかったケース）と、足下の水準のまま推移したケース（ベースケース）で、誘発輸出、逆輸入の金額がどのように推移するかを試算したものが**図表 4**である。

両ケースを比較すると、「輸出誘発効果」が著しく減少することで輸出は 5 兆円程度減少し、「逆輸入効果」が増加することで輸入が 2 兆円程度増加している。「輸出代替効果」、「輸入転換効果」には大きな変化が起きていないと考えると、空洞化は約 5 兆円の輸出減と約 2 兆円の輸入増を通じて、7 兆円程度の貿易収支赤字拡大効果を持っていることになる。

図表 3：誘発輸出金額、逆輸入金額が現地法人売上高に占める割合



図表 4：誘発輸出金額、逆輸入金額のシミュレーション



さらなる空洞化の進行は貿易収支赤字幅の拡大につながる

こうした空洞化の動きは、今後も貿易収支に大きく影響を与える見込みである。空洞化進行のトレンドが止まらなければ、今後5年間で貿易収支の赤字幅は2.5兆円程度拡大する計算となる。また、空洞化がさらに進行する場合、5年間で貿易赤字が7兆円程度拡大すると試算され、このケースでは経常収支も赤字化する可能性が高くなる。一方で、空洞化の動きが止まれば、貿易収支赤字幅は5年間で3兆円程度縮小する可能性もある。

自動車メーカーの海外工場が相次いで完成するなど、企業の海外進出の動きは2014年も継続している。為替が円安方向で推移したことで、国内生産を増加させる企業も出るなど一部に好転の兆しこそ見られるものの、空洞化の進行に歯止めをかけることは喫緊の課題であるといえよう。日本政府には、法人税の実効税率引き下げや、国家戦略特区の設立による規制緩和の推進などを通じて、国内の事業環境を大きく改善させるような施策が強く求められている。

図表 5：製造業の海外進出が貿易収支に与える影響の試算値

